

『浜松市におけるスクールソーシャルワーカーの基盤強化研修及び 講師（教員）の質向上（第2年目）』

代表者：川向雅弘（社会福祉学研究科長）
分担者：大場義貴、福田俊子、佐々木正和（社会福祉学研究科）
連携機関：平川悦子（浜松市教育委員会指導課スクールソーシャルワーカー・
スーパーバイザー）、
長坂聖子（浜松市教育委員会指導課スクールソーシャルワーカー）

【背景・概要】

2008年に文部科学省のスクールソーシャルワーカー（以下SSW）活用事業が開始された。一方で、急激な増員により様々な職歴、専門性の人材が任用されており、受け入れる学校側の戸惑い大きいことが懸念されている。

当事業分担者の大場と研究協力者の平川、長坂らは、2019年度本学地域連携事業研究費にて「静岡県内スクールソーシャルワーカーに対する専門的研修が支援活動に与える効果の検証」を行い、以下の4点の結論を得た。①SSW研修の効果は、性別、年齢、エリア、参加回数に関係なく認められた。②SSWの資質向上のためには、児童虐待・貧困対策等の研修と共に、スーパーバイズ体制の強化が求められる。また、エリアの特徴を活かすことやエリア間格差を解消していくことが求められる。③困難事例への支援を複数機関で連携していくためには「現状把握」、「必要な合意形成」、「連携の仕組みづくり」、「評価・改善」、「効果検証」という一連のPDCAサイクルに則った取り組みが必要である。④これらの取り組みを推進できるコーディネーターの養成や育成が必要である。

これらの結論から、SSW資質向上研修は必要と考え、2020年度地域連携プロジェクト費に「浜松市におけるSSWの基盤強化研修及び講師（教員）の質向上」を申請（代表者：川向雅弘）し、採択となった。

2020年度の研修成果について、参加者のリアクションペーパーから得られたキーワードにより、各回に横断的な多くの共通点が見出された（アセスメント・身近な社会資源・地域・見守り・フォーマル・インフォーマル・政策・医療・虐待・家庭の現場・葛藤・経験・気づき・巻き込まれ続ける・スーパーバイザー・スーパーバイジー・尊厳・成長・信じる・SSWの資質向上・自己研鑽・総合力・多機関連携・協働・支援の空白・学校側の理解促進・アウトリーチ・高校との連携・ヤングケアラー）。

これらが意味するものは、SSWの基本的対応能力であり、更なる深化が求められることが示唆されたため、引き続き社会福祉学研究科として『浜松市におけるスクールソーシャルワーカーの基盤強化研修及び講師（教員）の質向上（第2年目）』を2021年度地域連携プロジェクト費に申請し、採択となった。

【目的と対象・実施方法・研修内容・研修内容の評価方法】

①目的と対象：浜松市教育委員会から任用されているSSW16名を対象に本学教員が専門的研修を行い、基盤強化を目指した。研修は昨年度から引き続き2年目である。

②実施方法：当研修は、リカレント教育、人材育成、大学院としての地域貢献（知名度向上）等から、社会福祉学研究科（社会福祉学原理領域）が中心になって実施した。また、新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から研修は全てビデオ会議システムZoomで実施した。

③研修内容：研修の内容は、2020年度の研修を継続、発展させて内容とした。なお、

講師（本学教員）の質向上も兼ねて、第5回では、SSWの実践及び研究の先進地である、福岡県立大学の奥村賢一先生の講義を、SSWと本学教員が受講した（各回2～3時間）。

④研修内容の評価方法：研修会の目的は研究ではないため、各回や最終回に、アンケート等は行わなかったが、研修回毎に無記名式、任意のウェブ回答方式の「リアクションペーパー」として、学校組織へのアプローチ（15項目）、教育委員会へのアプローチ（4項目）、関係機関へのアプローチ（8項目）、子ども・保護者のアプローチ（3項目）を定型の設問（項目は山野2014を引用）とし、研修受講後、これらに対して、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」から択一回答と、感想を自由に記述して頂いた。

【結果】

①定型の設問に対する各回終了後の回答の平均値と割合：各設問の回答が「そう思う」または「ややそう思う」である場合を1点とし、各回の平均値と割合を示した。結果は表1の通りとなった（紙面の関係上、下位項目は省略）。

表1.各回終了後の回答の平均値と割合

	第1回 N=11(%)	第2回 N=11(%)	第3回 N=11(%)	第4回 N=11(%)	第5回 N=9(%)	平均(%)
1 学校組織へのアプローチ	8.0 (73)	9.8 (89)	9.3 (84)	9.0 (82)	6.7 (75)	8.6 (81)
2 教育委員会へのアプローチ	6.5 (59)	8.8 (80)	8.8 (80)	8.0 (73)	7.8 (86)	8.0 (75)
3 関係機関へのアプローチ	8.3 (75)	9.5 (86)	9.6 (88)	9.3 (84)	7.0 (78)	8.7 (82)
4 子ども・保護者へのアプローチ	9.7 (88)	11.0 (100)	9.7 (88)	10.7 (97)	6.0 (67)	9.4 (88)

②各回の感想の自由記述：感想の自由記述については、回毎のキーワードと、共通するキーワード（ソーシャルワーカーとしての基礎的な課題、SSWとしての課題）を抽出した。なお、個人を特定出来ない形に加工した。

表2. 各回の研修概要と抽出されたキーワード及び主なリアクションペーパー記述内容

第1回：7月16日／SSWの視点確認と研修が支援活動に与える効果／講師：大場／参加者：16人
<p>振り返りの重要性</p> <p>受けて来た研修を振り返りながら、また重要なキーワードと向き合えた／過去の資料を読み返すきっかけになった／日頃から足りていないと感じる事が多いが、今回の研修で改めて自分自身を客観的に振り返る事ができた／今年度の振り返りも何らかの形で実施してほしい／今の自分の目線で昨年度の研修資料を振り返りたい</p> <p>研修の連続性</p> <p>2年度連続で開催してもらえたことが良かった／SSWの育成には相談しやすい環境、新人研修、中堅研修等の充実も必要な課題／経験が浅いSSWが増えてきた中で、全体研修の持ち方は難しい／専門的研修を受けることが前提でないと、支援活動に繋がらない</p> <p>経験年数差を支援の差にはしてはいけない</p> <p>子ども、親との関わり方のポイント、福祉サービスでは表れない当事者の大変さをしっかり受け止めたい／経験年数のばらつきは支援内容に差を生じさせるのでは</p>
第2回：11月16日／ソーシャルワークの組織論／講師：川向／参加者：16人
教育現場を知りニーズを理解することが自信につながる

<p>あえてやっかいな事に一步踏み込む大切さを知った／事業所との動きの違いがあつて当然だ／効率が悪い事も積極的に実行して良い／「重要な他者」としての支援者でいられるよう努力したい／「支援」に「業務」の思想が蔓延しているとの指摘に、日ごろ感じていたモヤモヤが整理できた／支援の本質について深く考える機会になった</p> <p>利用者を取り巻く環境の把握</p> <p>利用者の暮らしを知ろうとすることも支援の1つだと認識出来た／利用者側の気持ちを理解しながらSWとして関わっていきたい</p>
<p>第3回：2月15日／スーパービジョンの理論と実際／講師：福田／参加者16人</p> <p>悩んだときは初心に立ち返る</p> <p>何年経験を積んだとしても、初心的な謙虚さが求められるのがソーシャルワークであると気づかされた／経験の浅いワーカーから大切な気づきをもらう／</p> <p>全ての経験は身になる</p> <p>現任者が語るという貴重な機会を持ってよかった／先輩がバリバリと働く姿しかみてこなかったのが失敗談が聞けて嬉しかった／失敗の経験がワーカーとしての成長に繋がるのが良く分かった</p> <p>SSW 同士つながることの重要性</p> <p>他のメンバーと意見交換の時間がほしかった／ステップアップできた失敗体験、先輩SSWの言葉が腑に落ちた体験などを語り合える仲間づくりが大切／うまくいかなかったことも含めて同僚同士で話せる環境が必要</p> <p>ゆるがない自分の軸を持つ</p> <p>自分の軸について考えるきっかけになった／支援者としての「ゆるがない軸」の重要性ということが印象に残った</p>
<p>第4回：2月15日／精神障がい者の生活について／講師：佐々木／参加者16人</p> <p>支援のすべては対象者を知ることから</p> <p>対象者を知る中で対象者の見え方が変わってくるのだと実感できた／対象者を知りどんな方法で支援ができるかを考え続けるのが大切／目の前の子どもたちの背景に目を向ける／子どもや家族の声に向き合う</p> <p>最善の結果を生むためのアプローチ</p> <p>若年層への精神疾患の予防的アプローチについても聞きたい／理不尽で残酷な結果にならないよう福祉ができることは何か／事例の話についての考察が興味深かった</p> <p>生育環境と心の発達につながり</p> <p>子どもの生育環境が心身の発達に様々な影響を及ぼすことが明確に分かった／マルチリトメントが脳に与える影響が興味深かった</p> <p>具体事例を知り理解を深める</p> <p>事例を用いた説明が分かりやすかった／全国の動向を初めて知った／精神科病棟退院後の現場が理解できた</p>
<p>第5回：2月22日／福岡市SSW事業の展開過程／講師：奥村／参加者16人</p> <p>よりよいSSW事業のための課題の洗い出し</p> <p>自らの課題を見直す／マクロ部分の実践について考えさせられた／人数が多いなりの難しさや課題／福岡の実践を参考に浜松の課題を整理する</p>

③抽出されたキーワードの分類：リアクションペーパーから抽出されたキーワードを、山野（2011）の分類に倣い、ミクロ領域、メゾ領域、マクロ領域に分類し、更にキーワードからの課題を抽出した。

表 3. キーワードの分類及び課題抽出

領域	抽出されたキーワードの分類	抽出された課題
ミクロ領域（個別事例へのアプローチ）	振り返りの重要性 研修の連続性 経験年数差を支援の差にしてはいけない 利用者を取り巻く環境の把握 悩んだときは初心に立ち返る 全ての経験は身になる SSW 同士つながることの重要性 ゆるがない自分の軸を持つ 支援のすべては対象者を知ることから 最善の結果を生むためのアプローチ 生育環境と心の発達のつながり 具体事例を知り理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> ・対象者と環境の理解 ・SSW の資質向上 ・SSW どうしのつながり
メゾ領域（校内体制作りへのアプローチ）	教育現場を知りニーズを理解することが自信につながる	・教育現場をよく知る
マクロ領域（市子ども家庭支援体制作りへのアプローチ）	よりよい SSW 事業のための課題の洗い出し	・よりよい SSW 事業のために

【まとめ】

各回終了後の回答の平均値と割合（表 1）では、「子ども・保護者へのアセスメント」について「役に立った」と回答する者は 88%であった。また、研修参加者からリアクションペーパーを通じて抽出されたキーワードはミクロ領域では「対象者と環境の理解」、「SSW の資質向上」、「SSW どうしのつながり」に集約される（表 3）。これは、浜松市内の小中学校に SSW を配置する動きが始まった 2008 年度以降、SSW が試行錯誤・切磋琢磨し続け、積み重ねた証であろう。人員を徐々に増やしながら、かつ入れ替えを繰り返しながら、研修の機会の提供により、SSW に求められているものは何かを議論できる場に辿り着いたことを意味するのではないか。参加者の記述を概観すると、頼りなさ、不安、SSW としての自信のなさを吐露する内容が目につく印象があるが、一方で、それらを克服すべき課題を理解し、今回の研修を「振り返るきっかけになった」と前向きに捉えている（表 2）。不安と迷いは理論を実践する上で避けられないものであり、揺れがあるからこそ自分の「軸」を確認し本来あるべき支援の姿を見極めることにつながる。現にリアペ中では、先輩方の失敗談に勇気づけられる者、迷ってもいい、効率が悪くてもいいという、全ての経験は身になっていくことを理解または実感する者が多く見られた（表 2）。

これらから、SSW の基盤であるミクロ領域に対して本研修の効果はあったと考えられる。

一方、本来 SSW の後ろ盾である教育委員会とのつながりを強めることについて、本研修が「役に立った」と答えた者は 4 分野の中で最も低く 75%であった（表 1）。また、抽出された課題もミクロ領域と比べ、メゾ領域、マクロ領域は少ない（表 3）。これらから、校内体制作りや教育委員会とのスムーズな連携促進には課題が残ることを表していると考えられる。

今回の研修では十分扱えなかったが、今後の SSW 活動の発展を考えると、メゾレベルそして、マクロレベルの研究や研修が必要になると思われる。

なお、2022 年 3 月に 3 年間の取り組みを、浜松市教育委員会 SSW 担当者に報告し、上記課題と SSW の可能性及び本学との更なる連携協働について意見交換を行った。

【結論】

SSWの基盤であるマイクロ領域に対して、本研修の効果はあった。今後、メゾレベル、マクロレベルの研究や研修が必要になり、本学としても継続的な連携協働が求められる。